

— 報 文 —

幼稚園における絵本の読み語りに関する研究(3)

— 計画的に指導を進めるための課題 —

長瀬 莊一 幸本 由紀子* 富本 佳郎**

A Study on Reading Picture Books to Young Children in Kindergartens (Ⅲ):

— Current Tasks to Carry Out Planned Instruction —

Soichi NAGASE, Yukiko KOMOTO and Yoshiro TOMIMOTO

要 旨

幼稚園における絵本に関する指導は、重視されているほどには計画的に行われていない現状にある。本研究ではそれを計画的に進めるための課題として、指導の意義と目標の明確化、指導時間の計画的設定、指導の場の環境的整備、指導方法の工夫・改善、絵本の選定・充実と利用法の改善、家庭における実態の把握などについて検討し、幼稚園の教育課程の中での絵本の指導の位置付けと小学校教育との連携について考察した。

キーワード：幼稚園 kindergarten, 絵本の読み語り reading picture book,
指導の意義と目標 significance and purpose of instruction,
指導時間 time of instruction, 指導方法 method of instruction

1. 絵本に関する指導における問題

幼稚園における絵本に関する指導については、幼稚園教育要領¹⁾における「言葉」の領域に、その基本的な考えが示されている。すなわち、その指導の「ねらい」は「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。」として、指導の「内容」は「絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像をする楽しさを味わう。」として記述されている。また、「内容の取扱い」としては、「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らしたりする楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。」と記されている。

なお、学校教育法の中でも「言葉の使い方を正しく導き、童話、絵本等に対する興味を養うこと」(第78条第4項)と明記されていて、絵本に関する指導はかなりの重みをもって考えら

* 兵庫県豊岡市立豊岡めぐみ幼稚園教諭

** 神戸女子大学名誉教授

れていることが分かる。しかし、幼稚園の現状についてみると、この指導の実践には担当者による差異がみられる。例えば、筆者ら（2003b）²⁾による調査によれば、1週間に読み語る絵本の冊数には1～2冊から10冊以上までの大きな開きがみられる。この結果から考えられるのは、一方で絵本に関する指導による大きな教育効果を確信している教師がいるのに対して、他方では「言葉」の指導がややもすると知識中心の教育になるおそれがあることから、絵本の指導についても、それを積極的に進めることにためらいを感じている教師も少なくないのではないかとのことである。とくに後者の気持ちの中には、絵本を読み語る時に言葉の発達ということを意識しすぎると、そのことが絵本を楽しむことの妨げになるという考えがはたらいているようにみえる。絵本の指導に対するこのような消極的な姿勢は、絵本を指導する意義や目標のとらえ方にも関係してくる。その意義や目標が明確に把握されていなければ、指導は消極的にならざるを得ないからである。その結果、その指導は教育課程の中で主要な位置ではなくて、副次的に位置づけられ、時間的にも少ない扱いになってしまうと考えられる。

しかし、2000年の「子ども読書年」を契機にして「国際子ども図書館」が開館され、全国各地の図書館では子どもの読書に関する行事も盛んに行われるようになった。そこでは幼児期における読書活動を促進するために、推薦絵本の紹介や読み語りの実践などが行われてきた。同時に、幼児向けの絵本の出版も増えて、絵本への関心が国民的な広がりをもせてきている。これに伴って、子どもの人格発達の多方面にわたる絵本指導への期待が改めて強くなってきていると考えられるから、幼稚園においてもその指導をより積極的に計画して推進することが当面の課題になっている。

ここでは、そのための具体的な課題として、絵本に関する指導の意義と目標の明確化、指導時間の計画的設定、指導の場の環境的整備、指導方法の工夫・改善、絵本の選定・充実と利用法の改善、家庭における実態の把握、教育課程に関する問題などについて、できるだけ幼稚園における教育実践の動向を踏まえながら詳しく考察することにした。

2. 絵本に関する指導の意義と目標の明確化

幼稚園における絵本に関する指導を計画的に進めるためには、その意義と目標が明確に把握されていなければならない。この目標と内容については、すでに幼稚園教育要領に示されたものをあげたが、ここでは、そこに示されている指導の意義に関する記述を基にして、絵本の専門家による意義のとらえ方や保護者がこれに対して抱いている期待を参考にしながら、幼稚園における絵本指導の実践に照らして検討すべき課題を探ることにした。

(1) 幼稚園教育要領に示されている指導の意義

幼稚園教育要領では「言葉」の領域の指導内容の一つとして「絵本や物語に親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。」ということがあげられ、その具体的な説明は『幼稚園教育要領解説』³⁾に述べられているが、それを要約して列挙すると次のようになる。すな

わち、読み手（教師）と周りの聞き手（友達）に合わせて聞く、興味や関心の幅が広がる、未知の世界に出会う（想像を巡らす）、疑問・驚き・感動・悲しみ・悔しさなどの気持ちに触れる、他人の痛みや思いを知る、ことである。

これをみると、言葉に関する直接の指導よりも、むしろ言葉を通した人間関係を主にした自分と他の人との関係についての指導に関わりが深いように見える。なお、文字に関する指導については、上記の『解説』には「幼稚園生活の中で、名前や標識、連絡や伝言、絵本や手紙などに触れながら、文字などの記号の果たす機能と役割に対する関心と理解が、それぞれの幼児に無理なく育つよう環境に配慮することが必要である。」⁴⁾と述べられていて、幼児における文字への関心の個人差を十分に考慮して対応することが求められている。

(2) 専門家に共通する意義のとらえ方と保護者が抱く期待

このことについて筆者ら（2004）⁵⁾はすでに、専門家の多くが子ども達が絵本に接することによって想像力を豊かに発達させていくことを重視していることを指摘してきた。子ども達は絵や言葉から想像力を働かせて物語を楽しんだり理解したりしていると考えられている。このほかにも、専門家たちは美的感覚のような情操的側面の発達や知的好奇心を促すことを絵本に期待している。とくに行動面への影響としては、絵本によって間接体験を増やすことができること、絵本の内容が子ども達の日常の遊びに発展して、生活を豊かにしてくれること、などがあげられている。さらに、絵本の読み語りが人間関係の持ち方に与える影響を重視する声も聞かれる。これは通常、「親子の絆」を強める効果と呼ばれているものであるが、もっと広く、大人と子どもの信頼関係を強める効果と言うこともできる。これに対して文字や知識の獲得を目標にすることには批判的な意見が多い。

これに関して筆者ら（2003c）⁶⁾が保護者を対象に行った調査では、絵本に対して最も期待しているのは「子どもの想像力を伸ばしてほしい」ということで、次いで多かったのが「親子でふれあう心温まる時間をすごしたい」、「子どもに優しい気持ちを持ってほしい」、「考える力を伸ばしてほしい」という結果であった。ここには親子の絆を強めたいという気持ちが表れているが、このほかにも、感受性、集中力、社会性、言語力など、子どもの人格の広い側面に対する期待のあることが分かった。これは専門家の考えと同じ傾向を示すものであって、「早く文字が読めるようになってほしい」という期待を持つものは少なかった。

(3) 幼稚園での教育実践からの検討

上記の専門家や保護者が示している絵本指導の意義のとらえ方については、幼稚園の教育実践の現状からみて、とりわけ大きな問題はないように思われるが、ここでは指導の出発点となる幼稚園教育要領に示されている意義や目標が妥当なものであるかどうかを教育実践を通して確かめ、それによってより明確なものとして把握することがより重要であると考え、その検討を行った。

具体的には、「1. 絵本の指導を通して教師と子どもの心理的距離はちぢまったか?」、「2.

子ども同士のつながりは強くなったか?」,「3. 絵本の指導によって子どもの発達にどんな効果があったか?」についての検討である。

①教師や友達との関係

検討の項目として挙げたはじめの2つの問いは、絵本指導の目標に挙げられている「先生や友達と心を通わせる」に関わる問題である。このことについては、年度の終わり頃(2~3月)になると、教師や友達と一緒に絵本を読むのが楽しいと言う子どもが多くなるが、そのためには毎日の絵本の読み語りの積み重ねが必要だと考えられる。このことを示す子どもの行動としては、絵本を通じた会話をしたり(共通の話題を持つ)、教師のところへ絵本を持ってきたりする(読むことを求める)ことが目立ってくる。

一般に教師と子どものラポール(親しい関係)を成立させるために、幼稚園では教師のほうからは子どもに話しかけたり、スキン・シップを用いたりするが、子どものほうからは教師に対して一緒に何かをすることを求めてくる行動が見られる。最も多いのは「遊ぼう!」という呼びかけであり、「読んで!」という呼びかけも子どもからのラポールの発信としての意味をはっきりと表している。したがって、こうした行動が目立つようになることは教師と子どもが心を通わせていることを示すものと考えられる。

また、子ども同士の関係についてみると、同じ絵本を一緒に読むことによって共通の話題を持つことができるだけでなく、絵本の内容に刺激されて新しい遊びが始まったり、何かを共同で作ったりするという行動がみられたりする。時には年上の性格を持った子どもが他の子どもに絵本を読んでやるという行動が見られることもある。子ども達の中には、読んだ絵本についての感想を友達に表現したりする者もいるが、こうした行動はいずれも子ども同士の心の交流を盛んにしているものと考えられる。

②人格の発達の側面

絵本の指導が子どもの人格面の発達にどんな効果をもたらすかについては、幼稚園教育要領にも明示され、専門家も保護者も指摘している「想像力」が、絵本を読むことで明らかにその伸びが促進されていくと考えられる。子ども達はよく絵本に書かれた言葉(文)以上のことを描かれた絵から感じとり、それを新しい言葉で表現しようとする。ここでは明らかに想像力を働かせて、絵本の文に書かれていないことにも思いを巡らせていることが分かる。これは同時に自分で考えようとする意欲の発達にもつながる効果を示唆している。

絵本はテレビや動画に比べて言葉による情報が少ない分だけ、かえって子どもの想像力を発揮する余地が多いと考えられる。また、テレビや動画による場面展開の早さに対して、絵本の場合にはストーリーの進行(話の成り行き)にも想像を巡らすことを可能にしてくれる。登場人物の心を推し量ったりすることが、一般の人間関係における相手の立場を理解する基盤になると考えることができる。

人格面の発達について考えられるこのほかの効果としては、「注意の集中力」が高まってく

ることが認められている。入園当初は短い時間（10秒程度）でも注意を持続することが困難であるため、できるだけ話の短い絵本を読むことが多いが、月日が経つにつれて子ども自身が次第に物足りなくなってきたり、より話の長い絵本を求めてくるようになる。それと同時に、子ども達の日常生活の中ですでに知っている事柄に対しては強い興味を示してくる反面、知らない事柄には無関心であることが多い。自分が知っていることについては、さらに深く知りたいという気持ちのあることが示唆される。

これは少し見方を変えると、「聞く力」が伸びてきたとすることができる。一般に子どもは自己中心的な性格の特徴を持っているために、相手の話を聞くのが下手だと言われているから、こうした絵本による聞く力への効果は「話すこと」と「聞くこと」を合わせた子どものコミュニケーション能力の発達を考える上で重要な視点を与えてくれる。とくに聞く力は幼少時から意図的に育てていくことが必要である。しかも、教師が絵本を読み語る場合には、たえず子どもの反応を見ながら話を進めていくから、自然なかたちで子ども達に注意を集中させることができる絶好の機会だと考えることができる。

また、「言葉に対する感覚」については、子ども達は絵本の中に出てくる印象的な言葉や言い回し（面白い言葉、くり返しなど）に強い興味を示し、「しりとり」、「言葉探し」、「回文」のような言葉遊びに発展させることがある。また、新しく耳にした言葉に関心を示し、理解できない言葉に出会うと訊ねてきて、理解できるようになると嬉しがる。このように絵本においては子ども達が日常では使わない言葉にたびたび接するから、絵本の指導は明らかに子どもの言葉の発達を促す効果が期待できる。しかし、他方では言葉の発達をあまり意識しすぎると絵本を楽しむことそのものを妨げるおそれがあることも否定できないため、言葉については子どもの自然な関心にそって無理のないように対応するのが適当と考えられる。

以上のように、絵本の指導は幼稚園での子どもの生活全般に広く影響を及ぼしていることが分かる。幼稚園においては、こうした教育的効果をさらに明確に意識しながら絵本の指導を行う必要がある。

3. 指導時間の計画的設定

絵本に関する指導を計画的に進めるためには、その指導時間が計画的に決められている必要があると考えられるが、ここでは幼稚園の現状を概観した上で、そこに関与する要因について考察することにした。

(1) 幼稚園における現状

幼稚園では絵本の指導をどんな機会に行っているのかについて、幼稚園の教師を対象に筆者ら（2003b）⁷⁾が行った調査の結果では、「降園前」（72%）が目立って多く、次いで「活動、保育の導入時」（25%）、「活動の切り替えをする時」（15%）、「落ち着いた時間を過ごそうとする時」（14%）、「朝の集まり、一斉保育の時」（11%）などであった。そのほかには、「昼食前」、

「昼食後」、「時間がある時」、「絵本を通して何かを伝えたい、共感したい時」、「子どもの求めに応じて」、「子どもが興味を持っている内容に合った絵本がある時」、「個別に、自由遊びの時（不安を伴っている時など）」が挙げられている。ここからは、一日の保育活動の節目になるような時間に絵本を読むことが多く、子どもの人格のある側面を伸ばそうという積極的な意図はあまり感じられない。このことは絵本を読み語る際に配慮している事項の中でも、「読む時間帯」への配慮があまりなされていなかったことにも表れている。ただ個々の教師によっては、どの時間帯ないし機会に読むかをおよそ決めていて、これに加えて臨時的に絵本を読んでいるという場合もあるようである。

(2) 時間設定に関する要因

子どもの集中心：一日の生活における子どもの気持ちの動きは激しいから、ある活動を行う場合に、その活動に注意を集中するために気分を変えたり、気持ちを落ち着かせる目的で絵本を読むことは一般に効果的だと考えられている。

子どもの関心：朝、登園してはじめに絵本を読むことについては、小学校以降で実施されている「朝の読書の時間」のように朝のほうがうまく思考が働くからよい、という主張があるが、これに対しては子どもの気持ちに沿わないという反論もある。登園した子ども達はまず身体を思いきり動かしたいという気持ちを持っているのではないかという意見である。

生活の流れ：降園前に絵本を読むのは、それが活動の合間に読む場合に比べて、教師にとっても、子どもにとっても気持ちにゆとりを持てる時間であるからである。同時に、一日の締めくくりとして子どもに楽しい気持ちで終わらせることがねらいになっており、それが指導の自然な流れにも合致していると考えられている。

他の保育活動との関係：季節や園の行事に関連して絵本を読むことがある。この場合はその内容と同様のことが子どもの身近な生活の中で起っていることに目を向けさせ、季節の変化や行事の意義を感じさせたり、考えさせたりするのに役立てようとするものであるから、絵本を読む機会はこのことについての指導時間との関係で決められることになる。

目標とする人格の発達の側面：このことについては、現状では絵本を読む際にあまり意識されていないように思われるが、絵本による指導の効果を考えれば、もっと積極的に教育活動の一部として取り入れていく教育課程の検討がなされてもよい。

読む絵本の量と頻度：たくさんの絵本を読もうとすれば、一日に1回の時間設定では不十分である。一日のうちに何回かの時間を持つか、1回に何冊かを読んだりするなどの対策が考えられるが、こうした時間を優先することはかなり難しい現状もある。

(3) 絵本の指導を充実させる方策

これまでみてきたことから、幼稚園において絵本に関する指導の時間を特別に設けることは、それほど容易ではないことが分かった。しかし、それは幼稚園における教育活動全体の中での絵本の指導がどのように位置付けられているかということに関わっていると考えられる。特別

の場合を除いて、一般に他の教育活動とは別の独立した指導として考えるために、その時間を設定することがためらわれているように思われる。これを他の教育活動の一部として積極的に位置付けることができれば、絵本を読む機会をもっと増やすことができるのではないだろうか。子どもの発達に及ぼす絵本の指導による効果は人格の広い側面にわたっていると考えられるから、意図的に教育課程の中に組み込んで指導を進めることが望ましいと考えられる。

例えば、絵本が子どもに与える効果の主要なものと考えられている「想像力」を育てる機会としては、一般によく絵本が読まれている降園前はあまり適当だとは言えない。読んでもらった後にも、そこで感じたことや考えたことを表現する機会が十分に持ちにくいからである。子ども達に必要な想像力を育てるには、もっと自由に思いを巡らすことができ、またその表現もできる時間的なゆとりが必要である。

4. 指導の場の環境的整備

絵本指導の環境的整備については『幼稚園教育要領解説』に「一人一人の幼児と絵本との出会いを充実したものにしていくためには、絵本が幼児の目に触れやすい場に置かれていて、しかも、落ち着いてじっくり見ることができる環境にあることが大切である。そのために、保育室における幼児の動線などを考えて絵本のコーナーを作っていくようにすることが求められる。」と述べられている⁸⁾。幼稚園によっては絵本の指導のための特別の部屋や独立した棟を持っているところもあるが、こうした理想的な環境にあるところはむしろ少ないのが実情である。

(1) 外部の騒音への対策

最も多い問題は隣のクラスから聞こえてくる大きな物音である。通常はそれぞれの教育活動に集中していて、それほど気にならない音でも、とくに静かに耳を傾けなければならない読み語りの場合には、それが注意の妨げになることがある。できるだけ他のクラスに迷惑をかけないように留意しても、そこには限界がある。隣のクラスの物音が気になる場合には、時間を後はずらすような対応が必要になってくる。

(2) 絵本コーナーの設置

たいていの保育室には絵本が置かれているが、その場でゆっくりと気分を落ち着かせて読むことは難しい。そこで別に自由な時間に絵本を手にとって見ることのできる場所を設けることが必要になる。そのために、図書室の一部を子どもが利用できるようにしたり、園内の共通のスペースに特別の場所を設けたりしているところもある。こうした工夫によって、絵本を読む子どもが増えたという報告もみられている。

(3) 基本的な考え方

絵本指導の場については、理想的な校舎を作ることを考えるのも必要であるが、現状施設の改善という観点から考えると、まずそれぞれの幼稚園が持っている条件の中での創意・工夫が求められる。その際、各保育室に設置する絵本の偏りを是正する方法についても配慮しなければ

ばならない。このために、園内の共通のスペースに設けられた絵本のコーナーには調整的な役割を果たすことが期待される。

5. 指導方法の工夫・改善

子ども達は全体として絵本に対して強い興味を示すが、その楽しみ方には個人差があって、楽しみの内容や楽しみの表現の仕方は多様であることが筆者ら（2003a）⁹⁾の調査ですでに分かっている。ここではこうした子ども達に対して、集団的に絵本を読み語る場合の工夫や今後の改善点について考えてみたい。

(1) 座席の決め方への配慮

筆者ら（2003b）¹⁰⁾が行った調査では、保育室で絵本を読む際に個々の子どもが占める座席の位置にはある程度の固定化の傾向がみられたが、座席の位置と絵本に対して感じている面白さの程度との関係はとくにみられなかった。座席の占め方については幼稚園では比較的自由に子どもに任せて、これに対する教師の配慮もあまり大きくないように思われた。

たしかに、子どもにもそれぞれ気持ちが落ち着く座席の位置というものがあるようだが、だからといって、いつもそのままいいとは考えられない。少なくともすべての子どもに絵本が見えるように配慮しなければならないし、その他にも留意すべき点があるのではないだろうか。とくに、絵本に対して興味を示さない子どもに対しては、この点についても何らかの働きかけが必要である。あまり強制的になるのは好ましくないが、絵本を読む前に声をかけるとか、絵本が見やすいところに座らせる、というようなことは、絵本に対する積極的な姿勢を育てていくために効果的な方法ではないかと考えられる。

(2) 取り上げる絵本の選び方

筆者ら（2003b）¹¹⁾の調査では、ほとんどの教師はその時に読む絵本の選択について、絵本の読み方と同様に大きな配慮をはらっている。基本的には教師自身の興味に偏らないように注意しながら、幼児期にふさわしいと考えられるものの中から、日頃の子どもの様子からみて、その時々の子どもの興味・関心に合うようなものを取り上げようとしている。この場合、1冊の絵本を単独に用意することもあるが、計画的に指導を行おうとすれば、数週間分として何冊かの絵本をセットとして用意するのが適当だと考えられる。また、子どもの多様な興味に応ずるためには、用意する絵本の種類にも広がりが必要とされる。

取り上げる絵本の選択に当たっての主な要因としては、絵本を読む目的、絵本についての教師の知識、子どもの理解力、子どもからの要望などが考えられる。このうち、絵本を読む目的や子どもの理解力については「絵本に関する指導の意義と目的の明確化」と「指導時間の計画的設定」の項で関連してふれているので、ここでは省略したい。

絵本について教師がどの程度の知識を持っているかについては、絵本の内容ばかりでなく、個々の絵本に対する子どもの反応の傾向をよく知っていることが望ましいが、毎年かなりの数

にのぼる多くの絵本が出版されている現状からみると、これに関して一人の教師が持っている知識や経験は限られてくる。しかし多くの場合、絵本の選択は教師個人に任されていて、事前に他の教師と相談することは少ないのが実情である。したがって、このことを補うために放課後などに非公式に話し合ったりすることはあるが、さらに、お互いに絵本の指導についての体験を交流するような公式な会合を持つことは、絵本の選択にとってたいへん効果的なことと考えられる。

また、読む絵本を選択する時に子どもからの要望を聞くことは大事であるが、いつも子どもの好みだけで選ぶのにも問題がある。教師が子ども達にぜひ読んでやりたいという絵本を選択する場合があっても当然である。一般に定評のあるものであるとか、前年度までに子どもが好ましい反応を示したものを参考にしたりすることができる。ただ、その年度によって子どもの反応が違ってくることもあって、いつも同じ反応を期待できないこともまた知っておく必要がある。

(3) 読み語り方の留意点

どのように絵本を読むかについては、すべての教師が大きな注意をはらっている。教師を対象にした筆者ら（2003b）¹²⁾の調査においても、落ち着いた雰囲気をつくること、子どもの目線と教師の位置、声の大きさ、読み方の抑揚や声色、などの工夫が具体的に指摘されている。

このうち、声の大きさについて考えると、あまりに大きいと子どもが落ち着いて聞くことができなくなるおそれがある。とくに甲高い声は子どもの中には驚く者が出てきたりするから、子ども達全員に聞こえる程度の大きさと読むような配慮が必要である。

また、抑揚をつけて読むことや、声色を使うことについては、これがあまり強いものであると、かえって子どもの想像力を発揮する妨げになるので、むしろ、淡々とした調子で読むほうがいと一般に考えられている。

このほかに、とくに大事なことは読む早さと間（ま）の取り方である。読み始めたら、子どもの顔色や様子を見ながら、読む速さを調節していくことが必要である。これには指導経験の積み重ねが大きな力になるが、この発達段階の子ども達の心の動きの早さを考えると、概してあまり遅くならないほうが適当だと考えられている。絵本のページをめくるタイミングなども同じような意味で、大事なことと考えられている。

6. 絵本の選定・充実と利用法の改善

絵本に関する指導を計画的に行うためには、その指導目標を達成するのにふさわしい絵本が整備されていなければならない。その際、子どもの人格の広い側面にわたる偏らない発達を考えると、いろいろな種類と内容の絵本を用意しておかなければならない。また、それらの絵本を活用するという観点からの改善についても考慮する必要がある。

(1) 絵本選びの観点

子どもに読み語るのに適切な絵本の選び方についての筆者らの考え¹³⁾は、すでに一般的な

観点として述べているが、ここでは、とくに幼稚園に限った問題として考えることにしたい。

まず、教師自身の興味だけに偏らないように、いろいろな種類や内容の絵本を用意することが必要である。多くの子ども達が好むナンセンス絵本に対しては、教師の中には抵抗を感じている者もいる。しかし、子どもの心が現実を離れた空想の世界を巡ることの意義を見直してみると、こうした絵本の効用も感ずることができるにちがいない。

集団的場面に適した絵本の外面的な特徴としては、本の大きさ、絵、文字の量、場面割り、などについて、それぞれの条件が考えられる。このうち、文字の量については子どもの興味の持続や、場面の展開のスピードという点から、これまでもしばしば問題になってきたことである。これについて、松本 猛 (1982)¹⁴⁾ は絵と文との関係について「…絵本の言葉は画面と画面をより自然にイメージを豊かにふくらませながら結びつけるものといえるだろう。…絵で表現することが困難なもの、たとえば具体的な形象をもたない概念や、思考の積み重ねなどをより多く表現することが求められるだろう。」と述べ、絵に表わしにくいものとして特定の時間や、音、会話、などを挙げている。そして、文字の量については、「…理想的には一目で文字が読め、同時に絵が見られる程度の文字量がよいということになる。」と述べている。

(2) 絵本の購入と利用法の改善

こうした絵本を用意するために、幼稚園では年間計画で定期的に絵本を購入しているのが普通である。どんな絵本を購入するかについての方法は幼稚園によって異なるが、幼稚園全体で相談して決めているところもあるが、むしろ担当者に任せているところが多いようである。その場合、数多くの絵本が出版されている中から、適当なものを選択するのは容易ではない。伝承物語（昔話）絵本は数が限られているし、科学・知識の絵本もそれほど多くはないから、それほど選択に困らないが、創作絵本については、関係雑誌や新聞、その他の定期的に発行される出版情報に留意しておく必要がある。この場合にも教師相互の情報交換が大事になってくる。

また、幼稚園が所蔵する絵本が多くなると、その管理が問題になってくる。各保育室に備えたり、全体で利用したりするのに効果的な方法を工夫しなければならない。教師が指導のために使うだけでなく、自由時間に子ども達が見たり、借り出したりするのに便利になっているか、保護者への貸し出しについても考えておかなければならない。

このことに関する最も多い問題は、教師に読んでもらった絵本に対して強い興味をもち、その直後に、その絵本を借り出したいという子どもが急増することである。一般的な対応としては、一人が利用する期日を短く制限して調整を図ることになるが、場合によっては特別に何冊かを購入して、対応することにもなる。このような絵本の利用の実態は、それを記録しておく、そこから指導のための基礎となる貴重な情報が得られるから、単に絵本の冊数ばかりでなく、絵本の表題についても記録しておくほうが役に立つと考えられる。同時に、こうした記録は絵本を購入する場合にも参考になるはずである。

(3) 他の教材との関係

絵本によく似た教材として紙芝居がある。これも絵本と同様に、子ども達を強く惹きつけるものの一つである。両者とも絵と言葉から成り立っている。後者には表面に文字がなく、子ども達は直接、言葉を聞くことになる。絵を見ながら、話を聞くということでは同じような働きを感じさせる。

しかし、よく考えると、絵本では絵が主役を果たしており、紙芝居では話（言葉）が主役になっているように思われる。絵本においては紙芝居に比べて言葉が少ないから、それだけ、絵から受ける影響が強い。読み手のほうも子どもが絵によって喚起される思考や感情の動きをできるだけ妨げないように、そこにある文字だけを淡々と読むから、それがあまり長くなると飽きてしまうおそれがある。とくに集団場面では文字の多い絵本は向かないと言われている。適度の早さで場面の展開を図ることが必要である。

これに対して、紙芝居の場合には、子ども達はストーリーの展開に強い興味を感じているから、話が多少長くなっても、それほど飽きないで聞くことができる。そこで言葉遣いも絵本の場合と違って、抑揚や声色などが多用される。このように子ども達の絵本に対する構えと、紙芝居に対する構えには相当の差異が感じられる。

絵本を読む場合には、読み手の顔が聞き手の子ども達にもよく見えるから、読み手の存在が子ども達にも強く意識され、紙芝居に比べて、読み手との心の交流により大きな影響を与えるのではないだろうか。また、絵本の読み語りは言葉の発達がまだ十分でない段階の子どもに対しても、無理なく適用できると考えられる。

7. 家庭における実態の把握

子ども達の多くは、その多少は別にして、幼稚園に入園するまでに家庭において絵本を読んでもらった経験を持っているし、また、入園後も読んでもらっている。幼稚園において絵本の指導を行おうとすれば、そのことに関する家庭の実情を知っておくことが大事だと考えられるが、筆者らの調査（2003b）¹⁵⁾では幼稚園の教師は案外、それを知ろうとしていない傾向のあることが示されている。しかし、個々の家庭における読み語りには大きな差のあることが予想され、それが幼稚園における絵本の指導に強い影響を与えていると考えられるから、このことに関する問題をここでとくに取り上げることにした。

(1) 家庭における一般的傾向

家庭においては絵本がどのように読まれているか、その実態に関して筆者ら（2003c）¹⁶⁾が行った調査によると、入園以前に読んだことがないという家庭は皆無で、読み始めたのは子どもが2歳以前というのがほとんどであった。

入園後の様子については、家庭によってかなりの違いがあって、読んだ絵本の冊数も1週間に1～2冊が比較的多く、次いで3～4冊、5～6冊が多かった。中には20冊以上も読んでい

る家庭もあり、これと反対に最近はまだ読んでいないという家庭もあった。また、無記入の回答も多くあって（約1割）、これは絵本を読むのが多かったり少なかったりと一定していないことを示していて、日常的な習慣にまではなっていないことを示唆している。

絵本を読む時間帯としては「就寝前」が過半数を占めるが、とくに決めないで、時間の余裕があった時とか、子どもからの要求があった時に読むというのも少なくなかった。しかし、子どもの年齢が大きくなるにつれて、こうした要求にすぐに応ずることが少なくなっている。なお、絵本を幼稚園から借りて帰った時や、新しく買った時にはかならず読むようにしているようである。

これらのことから個々の家庭における絵本を読むという生活は多様であることが分かるが、こうした実態を踏まえて幼稚園での指導を考えていかなければならない。

(2) 幼稚園における指導との関連

まず問題になるのは、幼稚園で取り上げる絵本を選ぶ際に、子ども達が家庭でその絵本を読んでもらったことがあるかどうかということである。家庭で読んだことのあるものと同じものを幼稚園で読む場合には、個別に読んでもらう場合とちがって、集団場面での特別の効果が考えられる。一緒に聞いたという共通の体験がその後の友達との会話や遊びにも影響をもたらすことになるはずである。

とくに、定評のある絵本については、くり返し読むことを勧める意見もあるくらいだから、これをすべての子どもに読むことが必要である。しかし、そのほかの絵本については、家庭で読んでもらっていない絵本をできるだけ取り上げるようにすることにも意味がある。子ども達は好奇心が強いから、新しいものに対しては強い関心を示すに違いない。これまでに知らなかったことを知って、さらに興味や関心の幅を広げていくことが期待されるからである。したがって、新しい絵本を取り上げる場合には、とくに子ども達の反応を詳しく把握しておく、こうした経験の積み重ねが、その後の指導に役立つことになる。

(3) 家庭と幼稚園の協力体制

一般に家庭で絵本をよく読んでもらっている子どもは、幼稚園においても落ち着いて絵本を読んでもらうことができる。これに対して、幼稚園で絵本に興味を示さない子どもの中には、家であまり読んでもらっていない子どもが多くみられる。しかし、幼稚園での絵本の指導がきっかけになって、絵本を読むことに興味を持ちはじめた子どもは家に帰ってからも絵本を読みたがるようになったという例も少なくない。また、子どもへの絵本の貸出しだけでなく、保護者にも直接、貸し出しを行っている場合も多く、これは幼稚園に所蔵されている絵本を知ってもらう機会にもなり、家庭において読む絵本を選ぶ時の参考にもなっている。

家庭において絵本を読むことが充実すれば、それが親子の絆を強くするばかりでなく、幼稚園における絵本の指導を強化するのに大きな効果を発揮すると考えられるから、この点について、幼稚園から家庭に対して何らかの働きかけが必要になってくる。そこで、例えば仕事や小

さな子どもの面倒などで忙しい保護者に対しては、短時間でもいいから絵本を読むように勧められることになる。しかし、この時でも読んでほしい絵本を指定するのではなく、保護者からの質問があれば答えるというほうが強制的にならなくてよい。もっと強く働きかけるのであれば、すべての保護者を対象にして図書館員その他の専門家から、絵本を読むことの意義について話をしてもらおうのも一つの方法である。その際、絵本の選び方や絵本を読み語る会の開催などの情報についても助言してもらおうことができるだろう。

また、年度当初にその幼稚園の基本的な教育方針の一つとして、絵本の指導を重視していることを保護者に伝えることも大事である。その上で、その年度における家庭で絵本を読むための具体的な目標を幼稚園全体の目標として、あるいはクラスの目標としてあげておくのも、そのことを実行するのに効果的だと考えられる。「100冊にチャレンジしよう」というのもその一例である。また、子どもが家庭において絵本のことを話題にした時に、それが子どもの発達にとって重要な意味を持っていることを理解してもらうことも必要である。いずれにせよ、教育方針が明確であることは保護者からの信頼を得るのに欠かせないものであって、この信頼をもとに、家庭と幼稚園の協力体制が強化されることが期待される。

8. 教育課程に関する問題

幼稚園教育要領によれば、絵本に関する指導は「言葉」の領域における「ねらい」と「内容」にその記述がみられるが、その他の領域で扱われることがあってもよい。ここでは教育実践の立場からみた絵本の指導が幼稚園教育課程の中で占める位置付けについて、あらためて考察するとともに、小学校における読書指導との関係についても、どのような連携が考えられるのか検討することにしたい。

(1) 「言葉」以外の領域との関連

幼稚園における絵本指導の実際をみると、そこでは言葉に関する指導は控え気味であるように感じられる。指導の中心になっているのは、そこに描かれた絵からイメージをふくらませていくことであり、そこで子ども達が大いに想像力を発揮できるような配慮がなされている。

また、絵本の内容をみると、そこにはさまざまな対象や活動が含まれている。例えば科学・知識の絵本は自然現象に関するものを扱っているから、「環境」の領域に関する指導のためにも役立つ情報を与えてくれる。さらに、基本的な生活習慣・態度に関する内容を扱った絵本も沢山あるから「健康」領域の指導にも役立つし、日常生活の中で感性や創造性を大事にすることに関する絵本は「表現」領域の指導にも役立つことができる。なかでも、人と人との交渉を扱った絵本は数も多く、これは「人間関係」の指導にとって適当であると考えられる。

ところで、幼稚園教育はその教育要領に示されている「…幼児が環境にかかわって展開する具体的活動を通して総合的に指導されるものであることに留意しなければならない。」¹⁷⁾という方針から、領域別に教育課程を編成しないように考えられている。絵本に関する指導はそれ

が計画的に行われる場合には、まさに総合的な指導にふさわしいものとして見直す価値があるのではないだろうか。

(2) 小学校の教育課程との連携

小学校学習指導要領の中には「絵本」に直接ふれた記述はないが、関連項目としては「国語」の第1学年及び第2学年の「内容の取扱い」の中に、「読むこと」について次のような記述がみられる。すなわち、「昔話や童話などの読み聞かせを聞くこと、絵や写真などを見て想像を膨らませながら読むこと、自分の読みたい本を探して読むことなど」が例として挙げられ、とくに第1学年においては、このことを主として取り上げるように配慮することを促している¹⁸⁾。

また、「指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い」の中では、「…児童の読む図書については、人格形成のため幅広く、偏りがないように配慮して、選定すること。」¹⁹⁾という記述がみられ、幼稚園における絵本の選定と同様の考え方が示されている。したがって、読書の入門期にある小学校低学年の子ども達に対して、絵本を用意しておくことは少しも指導の妨げになるとは考えられない。

むしろ、「聞くこと」と「話すこと」を中心とした幼稚園の指導から、あまり急激に「読むこと」と「書くこと」を中心にした指導に移ることに、そうした変化にうまく対応できない子どもを生んでしまうおそれがある。自分で読書をするのと並行して、教師から絵本を読んでもらう機会があるほうが望ましいとは考えられないだろうか。現に小学校でも、「朝の読書の時間」などで子ども達に絵本を読み聞かせている教師の実践が報告されているが、その指導は絵本の内容からの学習ばかりでなく、教師と子どもの心の結びつきにとって重要な働きをしていると考えられる。これに関して、絵本の専門家の中にも、子ども達が自分で文字が読めるようになって、親子の絆を大事にするために絵本を読んでもほしいという意見がある。

絵本との関わりを考えさせる記述として、低学年の「生活科」の目標に「身近な人々、社会及び自然に関する活動の楽しさを味わうとともに、それらを通して気付いたことや楽しかったことなどを言葉、絵、動作、劇化などにより表現できるようにする。」²⁰⁾と述べられている。実際の指導において、それぞれの児童が自分の感じたことを表現した絵について、互いに感想を述べ合う場面を考えると、それは絵本を見て、感じたり考えたりする場面とよく似ている。おそらくそこには絵本を読んだ体験が生きてくるのではないかと考えられる。「図工科」においても、児童が感じたことや想像したことを絵に表現する機会は多くあるはずであるから、幼稚園における絵本の指導が、こうした学習活動に発展する基礎としての意味を持ってくように考えられる。

子どもの発達の継続性を考えれば、幼稚園教育と小学校教育との連携の問題はあらゆる面で考えなければならないが、絵本についても、その積み重ねによって指導の連携が強く図られなければならない課題の一つであると考えられる。

引用文献

- 1) 文部省, 幼稚園教育要領, チャイルド本社, pp.9-10 (1998)
- 2) 長瀬荘一・幸本由紀子・富本佳郎, 幼稚園における絵本の読み語りの実態, 神戸女子短期大学論攷, 48, p.126 (2003b)
- 3) 文部科学省, 幼稚園教育要領解説, フレーベル館, pp.117-118 (1999)
- 4) 文部科学省, 前掲書, p.119 (1999)
- 5) 長瀬荘一・幸本由紀子・富本佳郎, 幼稚園における絵本の読み語りに関する研究 (2), 神戸女子短期大学論攷, 49, pp.14-15 (2004)
- 6) 長瀬荘一・幸本由紀子・富本佳郎, 家庭における絵本の読み語りの実態, 神戸女子短期大学論攷, 48, p.145 (2003c)
- 7) 長瀬荘一・幸本由紀子・富本佳郎, 前掲書, pp.126-127 (2003b)
- 8) 文部科学省, 前掲書, p.121 (1999)
- 9) 長瀬荘一・幸本由紀子・富本佳郎, 幼稚園における絵本の読み語りに関する研究 (1), 神戸女子短期大学論攷, 48, pp.1-20 (2003a)
- 10) 長瀬荘一・幸本由紀子・富本佳郎, 前掲書, pp.129-135 (2003b)
- 11) 長瀬荘一・幸本由紀子・富本佳郎, 前掲書, pp.127-128 (2003b)
- 12) 長瀬荘一・幸本由紀子・富本佳郎, 前掲書, pp.127-128 (2003b)
- 13) 長瀬荘一・幸本由紀子・富本佳郎, 前掲書, pp.9-23 (2004)
- 14) 松本 猛, 絵本論－新しい芸術表現の可能性を求めて－, 岩崎書店, pp.64-72 (1982)
- 15) 長瀬荘一・幸本由紀子・富本佳郎, 前掲書, pp.127-128 (2003b)
- 16) 長瀬荘一・幸本由紀子・富本佳郎, 前掲書, pp.139-150 (2003c)
- 17) 文部省, 前掲書, p.5 (1998)
- 18) 文部科学省, 小学校学習指導要領 (改訂版), 国立印刷局, pp.9-10 (2004)
- 19) 文部科学省, 前掲書, p.17 (2004)
- 20) 文部科学省, 前掲書, p.62 (2004)